

中世日本語資料の疑問文  
——疑問詞疑問文と文末助詞との相関——

竹村明日香 (大阪大学特任研究員)

金水敏 (国立国語研究所客員教授)

0. はじめに

現代日本語における要説明の疑問文 (以下、「疑問詞疑問文」)<sup>1</sup>には、(1a) のような直接疑問文と (1b) のような間接疑問文が存在する (以下、傍線部・[※] は発表者注)。

- (1) a. 昨日どこへ行きましたか? [直接疑問文]  
b. 彼がどこへ行ったかわからない。 [間接疑問文]

しかし、(1b) のような「疑問詞一カ」となる間接疑問文は、室町時代から江戸時代初期にかけて徐々に出現してきたものであり、初期の頃は抄物やキリシタン資料 (2) にわずかに確認されるに過ぎない (高宮 2005)。

- (2) 悪党が多う籠つてみたれば、何たるものしわざか存ぜぬなどと種々様々のことを語られた。  
(『天草平家』巻二、146)

従来こうした間接疑問文については、現代日本語との関連もあって、カを文末助詞にとる例が中心に論じられてきたが、一方で、間接疑問文が発生しはじめたころの中世日本語では、文末助詞にゾ (3a)、又はヤ (3b) をとる例も数多く確認できる。

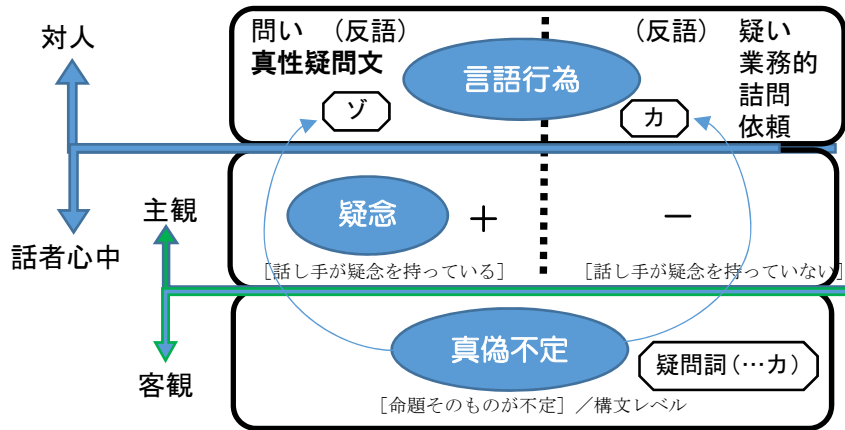
- (3) a. 右馬. して兼平が兄の樋口の次郎はなんとなつたぞ? (『天草平家』巻四、248)  
b. サント答へて宣はく、[…]<sup>[※86年の]</sup>この中に一度も凶事と与へ給はず、今日に至つて一命と与へ給う御作者に何として、悪口を申すべきやと。(『サントス』巻二、318)

特に (3a) のような文末助詞がゾの例は、中世の疑問詞疑問文として標準化しており、とりわけ対話相手から解答を要求する〈問い〉の表現において一般化している (磯部 1992)。対して、「疑問詞一カ」となるような文末助詞がカの疑問詞疑問文は、「疑問詞一ゾ」や「疑問詞一ヤ」に比べて勢いが劣っており (山口 1990 : 119)、頻用されていたとは言い難い状態にある。

ではなぜ頻用度の点で劣る「疑問詞一カ」が、中世から間接疑問節として選ばれるようになったのか。本発表ではその理由を明らかにするため、ゾ・カ・ヤの文末助詞をとる疑問詞疑問文を比較・検討し、これらが言語行為 (〈問い〉〈疑い〉〈反語〉) や統語構造といかに関わっているのかという点を主に追究する。そしてそれらの結果を統合し、間接疑問文成立への道筋を提示する。

<sup>1</sup> 本発表では以下、wh- 疑問文を「疑問詞疑問文」又は「要説明の疑問文」と呼び、Yes/No 疑問文を「肯否疑問文」又は「要判定の疑問文」と呼ぶこととする。

【図1】 要説明の疑問文における三つのレベル（金水案）



※注： …中世の疑問詞疑問文における表現形式。

### 1. 先行研究と問題の所在

各疑問詞疑問文がどの言語行為と結びつきやすいかは、おおよそ先行研究で明らかにされている。

柳田（1985）は、『竹取物語』と『天草版伊曾保物語』の疑問表現形式を【表1】の通り「要説明」と「要判定」の疑問文に大別し、それらを〈問い〉〈疑い〉〈反語〉という三つの言語行為に分類して、それぞれで頻用される形式を次のように掲げる。

【表1】 柳田（1985：128-129） ※太線・太字は竹村補注。

	言語行為	竹取物語	天草版伊曾保物語
要説明の疑問表現	問い	疑問詞 (……) カ……。 疑問詞……ゾ。	疑問詞……ゾ。
	疑い	疑問詞カ……。 疑問詞……ゾ。	疑問詞……カ。
	反語	疑問詞 (……) カ……。 疑問詞……。	疑問詞 (…) カ…。 疑問詞……ゾ。
要判定の疑問表現	問い	……ヤ……。 ……カ。	……カ。
	疑い	……ヤ……。 ……ヤ。	……カ。
	反語	……ヤ (ハ) ……。 ……ヤ (ハ)。	……カ。

これによると中世では、「疑問詞—ゾ」が〈問い〉〈反語〉、「疑問詞—カ」が〈疑い〉の言語行為を表す際に頻用されていたことが窺える<sup>2</sup>。なおヤは、『日本大文典』に「Ca (か) と Ya (や) は

<sup>2</sup> 〈疑い〉の「疑問詞—カ」は、対話相手に向けられている言葉であっても、表明する態度は答えを要求するというより疑っていると解し得るものである（柳田 1985：124）。

イソポが言ふは、「今日まではこの家のお主なれども、明日は何とならせられるか」と言うて、先の諍ひを語つたれば、  
（『天草伊曾保』）

同じ意味を持ってゐる。Ya (や) は話しことばよりも書きことばに多く用ゐる。」(巻二、89v) とある通り、文語資料では、〈疑い〉で「疑問詞一カ」に代り「疑問詞一ヤ」が用いられている<sup>3</sup>。

上記のような言語行為と表現形式の結びつきについては、中世の他資料でも確認されており、例えば覚一本『平家物語』でも「疑問詞一ゾ」に〈問い〉の性格が強く、要説明の疑問文として標準化してきていること(磯部 1992・1993)、また「疑問詞一ゾ」は、近世前期には文末が「φ」「ヂヤ」「カ」にとって代わられていることなどの報告がある(紙谷 2000)<sup>4</sup>。

しかし一方で、こうした〈問い〉〈疑い〉〈反語〉の言語行為が、統語構造ではいかに相違・相関しているのかといった点については未だ十分な考察がなく、また、どのような言語行為的・統語的理由により「疑問詞一ゾ」ではなく「疑問詞一カ」が間接疑問文の疑問節として選択されたのか、という点についても十分議論されてきたとは言えない。

そこで本発表では、従来注目されてこなかった言語行為と統語構造の関係に目を向け、以下の諸点について検討する。

- (4) a. 疑問詞の種類と、文末助詞ゾ・カ・ヤの結びつきについて。[3.2 節]
- b. 言語行為の再検討。[3.3 節]
- c. 言語行為と統語構造の相関性。[3.4 節]

## 2. 調査資料と調査方法

調査資料には、キリシタン資料 2 作品と抄物 2 作品を用いた。主な考察は、口語キリシタン資料の『天草平家』で行い、抄物は補足的に用いた。

- (5) a. 〈キリシタン〉『天草版平家物語』(口語)、『サントスの御作業』(文語)
- b. 〈抄物〉『玉塵抄』(巻 4 まで)、『毛詩抄』(巻 4 まで) (※具体的な資料名は稿末記載)

なお、中世期資料には係助詞が文中に位置して係り結びを生じている例(例: 誰ぞ一 [連体形])もあるが、本発表では、現代語との関連を考えるため、文末に現れる(6)の形式に限定して用例を採集し、会話文・地の文・心中思惟に分類した。

- (6) 疑問詞一ゾ、疑問詞一カ、疑問詞一ヤ

用例では、意味的に分裂文と通じやすく分類が困難な名詞述語文を除外した(例: 何たる者ぞ)。またそれらに準じる、「あり」「ござる」が述語にくる例も除外した(例: 何とござるぞ)。

<sup>3</sup> また『日本大文典』では、ゾは「純然たる疑問の標し」(巻二、89v)であるが、時には、カがゾに代わることを指摘する。しかしその場合の状況や理由については言及がない。

○ある場合には、Ca (か) は純然たる疑問の標しであって、Zo (ぞ) の代りに置かれる。その場合には疑問名詞の後に置く。例へば、Nandoquica? (何時か。)又は、Nandoquizo? (何時ぞ。)[...] Nanigotouo itaitaca? (何事を致いたか。)(巻二、89)

<sup>4</sup> 他に中世の疑問表現全般の調査に長瀬(1967)、反語表現に矢島(1995)、疑問表現の文末助詞がゾかヂヤに推移することについては外山(1957)などがある。名詞句位置のカについては衣畑・岩田(2010)参照。

### 3. 調査結果

#### 3.1 全体数

各資料での全体数は【表 2】の通りである。

【表 2】「疑問詞—文末助詞」の全体数

資料形式	キリシタン資料		抄物	
	天草平家 (口語)	サントス (文語)	玉塵抄 (巻4まで)	毛詩抄 (巻4まで)
疑—ゾ	142	97	28	123
疑—カ	34	2	2	0
疑—ヤ	0	30	1	0
疑—他	2*	4**	21***	3****
計	178	133	52	126

※注 : \*「疑—ヤラ」「疑—ゾヤ」各1例。 \*\*「疑—ゾヤ」4例  
 \*\*\*「疑—ヤラ」20例、「疑—コソ」1例。\*\*\*\*「疑—ヤラ」3例。

どの資料においても、文末助詞ではゾが大半を占めている。カは口語体、ヤは文語体資料で用いられるという偏りがある。したがって以下では、「ゾ」と「カ（ヤ）」を対比的にみて検討する。

#### 3.2 疑問詞の種類と文末助詞の結びつき

文末助詞「ゾ」「カ（ヤ）」は、疑問詞の種類との結びつきにおいて相違がある。

まず『天草平家』の「疑問詞—ゾ」と「疑問詞—カ」を疑問詞の種類別に分類したのが【表 3】と【表 4】である。

【表 3】『天草平家』の「疑問詞—ゾ」

疑問詞の種類	用例数	疑問詞の内訳
何—	89	何と 44、何として 12、何に 7、何たる 4、何事を・何とて・何ほどの・何の各 3、何によって・何しに・何を各 2、何としたれば・何とやうに・何の故に各 1
なぜ—	31	なぜに 31
いづく・いづち・どこ—	6	いづくへ 1、いづちへ 1、どこ{で/へ/を/の} 各 1
いつ—	6	いつの 3、いつ 1、いつから 1、いつまで 1
いか—	6	いかが 3、いかがほどの 2、いかに 1
誰—	4	誰に 2、誰が 1、誰を 1
合計	142	

【表 4】『天草平家』の「疑問詞—カ」

疑問詞の種類	用例数	疑問詞の内訳
何—	21	何と 7、何とした 6、何たる 2、何として 2、何{に/の}各 2、何者が 1、なんぼう 1
いづく・どこ—	6	いづく{に/へ/より}各 2
いか—	1	いかなる 1
なぜ—	3	なぜに 3
いつ—	2	いつ{の/まで}各 1
誰—	1	誰が 1
合計	34	

まずゾは「何一」系との結びつきが強く、中でも「何と」との共起が目立つ。

- (7) a. 重衡守護の武士にむかうて、「さてもこの女はいたいけな者ぢや：名をば何と言ふぞ」  
と仰せらるれば (『天草平家』巻四、302)
- b. 平家の人々 [※義仲の平家討伐を] もれ聞いて、「これは何とせうぞ」と言うて、みな  
騒がれたれば (『天草平家』巻四、157)

しかし「何と」の44例のうち、半数に近い19例が、(7b)「何とせうぞ」(10例)、「何となつたぞ」(5例)、「何とあらうぞ」(4例)の3形式で占められている。したがって、「何と一ゾ」は慣用表現として固定化した言い回しであるために用例数も多くなったと考えられ、実質的には(8a-b)のように「なぜに」という理由説明を求める疑問詞が最も多いといえる。

- (8) a. 頼朝池殿に対面あつて、「なぜに宗清は参らぬぞ」と仰せらるれば、  
(『天草平家』巻四、321)
- b. 貞能つと寄つて、「なぜにこれほどの御大事に軍兵どもをば召し具せられぬぞ」と  
申したれば、 (『天草平家』巻一、30)

一方で、カは、「何一」系との共起が最も多いものの、ゾのように、取りたてていずれかの疑問詞との結びつきが強いという例は見いだせない(前掲【表4】参照)。

- (9) a. [※若君の六代は] 聖を見させられて、なにと思し召されたか、涙ぐませられたれば、  
(『天草平家』巻四、387)
- b. <sup>宗光</sup>「あらこともかたじけなや! [...] このほどは屋島にござるところ承ったに、これまでは何として伝はらせられたか?」  
(『天草平家』巻四、317)

このような疑問詞の種類と文末助詞との結びつきについては、文語体の『サントス』においても同様の傾向が見いだせる。『サントス』の「疑問詞一ゾ」が【表5】、口語体での「疑問詞一カ」に相当する「疑問詞一ヤ」が【表6】である。

【表5】『サントス』の「疑問詞一ゾ」

疑問詞の種類	用例数	疑問詞の内訳
何一	70	何とて31、何と10、何たる8、何事を8、何の5、何として3、何とやうに2、何{しに/より/を}各1
いづく・いづ方	14	いづくに6、いづくより5、いづくへ2、いづ方へ1
誰一	6	誰に3、誰にて2、誰人の1
いか一	5	いかが2、いかで・いかにして・いかほど各1
いつ一	1	いつごろ1
いづれ一	1	いづれが1
合計	97	

【表 6】『サントス』の「疑問詞—ヤ」（※口語での「疑問詞—カ」に相当）

疑問詞の種類	用例数	疑問詞の内訳
何—	17	何と 8、何として 3、何とて 2、何事{にて/を}各 1、何事に 1、何たる 1
いか—	9	いかが 6、いかに 1、いかにとして 1、いかほど 1
いづく	4	いづく{に/より}各 2
合計	30	

【表 5】のゾで、「何—」系の疑問詞が多い中でも“なぜ”“どうして”という理由説明を要求する「何とて」が最も多く約半数（70 例中の 31 例）を占めている（10a, b）。一方で【表 6】の通り、ヤではとりたてていずれかの疑問詞との結びつきが強いとはいえない。

- (10) a. アポストロ→息子いかに子, 何とて汝の親より逃ぐるぞ? (『サントス』巻一、88)  
 b. 辺りの人々これを見て父母を諫めて曰く, 何とていらぬ辛勞をせらるるぞ?  
 (『サントス』巻一、46-47)

以上の通り、ゾと、カ（ヤ）では選択される疑問詞の傾向が異なっており、ゾは理由説明を求め“なぜ”を表す疑問詞（「なぜに」「何とて」）との共起が多く、一方でカ（ヤ）は特定の疑問詞との強い結びつきが見いだせないということが指摘できる。

### 3.3 言語行為の再検討—〈問い〉〈疑い〉〈反語〉の分類—

本節では、言語行為と統語構造の相関性を検討する前段階として、言語行為の 3 分類〈問い〉〈疑い〉〈反語〉と表現形式「疑問詞—ゾ」「疑問詞—カ（ヤ）」の相関性について再検討する。

#### 3.3.1. 分析方法

宮地（1971）、柳田（1985）、山口（1990）、安達（2004）等を参照し、疑問詞疑問文を以下の通り 3 分類し、それぞれを「会話文」「地の文」「心中思惟」に分類した。

- 〈問い〉 聞き手が存在し、その聞き手から疑問詞についての明確な説明を要求するもの。  
 〈疑い〉 聞き手がない、あるいは存在していてもその疑問詞に対して明確な答えを出せる人物がいないと判断できるもの（自問・心中思惟・心情吐露の独り言など）。  
 〈反語〉 疑問文の形式をとっていながら、すでに否定の判定を内に籠めており、聞き手に疑問詞に対する具体的な説明を求めていると判断できるもの。

本発表では上記のうち、特に〈問い〉と〈疑い〉に注目する。

『天草平家』と『サントス』における上記の 3 分類が、次の通りである。

【表 7】『天草平家』疑問詞疑問文の言語行為

		ゾ	カ	ヤ
〈問い〉	会話	70	5	-
〈疑い〉	会話	16	6	-
	地／心中*	8 (4/4)	19 (13/6)	-
〈反語〉	会話	42	4	-
	地／心中	6(5/1)	-	-
合計		142	34	0

\*：地の文・心中思惟合計（地の文／心中思惟）

【表 8】『サントス』疑問詞疑問文の言語行為

		ゾ	カ	ヤ
〈問い〉	会話	74	-	6
〈疑い〉	会話	7	1	2
	地／心中	11 (10/1)	1 (0/1)	13 (13/0)
〈反語〉	会話	5	-	4
	地／心中	-	-	4 (4/0)
合計		97	2	29

以上のうち、『天草平家』の結果【表 7】から指摘できるのは、次の2点である。

- (11) a. 「疑問詞一ゾ」は、主に〈問い〉で用いられ、聞き手が存在する会話文で使用される例が中心をなす。
- b. 「疑問詞一カ」は〈疑い〉を表す例が多く、地の文・心中思惟を中心に用いられる。〈問い〉の例もあるが、それらは詰問調であるという特徴がある。

(11a) は、「疑問詞一ゾ」が〈問い〉を中心に用いられるという磯部（1992）の指摘と合致する。これらは（12a-b）のように話し手が聞き手に対し積極的に働きかけ、疑問詞の部分に対する明確な解答を要求するものである。

- (12) a. 右馬. してその三位入道は惣別は何たる人であったぞ？

（巻二、229）〈問い〉

- b. 宗盛この人々 [※維盛ら] をお見つけあつてから, [...] 「さて今まではなぜにおそかったぞ」とあつたれば, 維盛「そのおことでござる [...]」

（巻三、190）〈問い〉

一方、「疑問詞一カ」は〈疑い〉に多く見られる。したがって心中思惟（13a）や地の文（13b）が中心となる。

- (13) a. [※重盛は] さて成親卿をばいづくにおかれたかとここかしこの障子を引きあげ、引きあげ見らるれば, (巻一、30) 〈疑い／心中思惟〉
- b. 池の大納言殿と申す人は館に火をかけて、これも出らるるが、何と思はれたか、道から手勢三百余りを引き分けて、赤旗をばみな切つて捨てて、都へ引き返されたれば (巻三、188) 〈疑い／地の文〉

会話文にも用いられることはあるが、(14a) のように、相手に対する働きかけは弱く、どちらかという自身自身の当惑を一方向的に吐露しているだけの発言となっている。(14b) も会話文ではあり、聞き手はいるものの、相手からの解答は求めている例である。

- (14) a. 「法皇のござらぬは、どこへ御幸なされたか」と言ひあはるる声に聞きないて、

（巻三、180）〈疑い／会話〉

- b. <sup>〔※葉を踏み敷く音がして〕</sup> 女院「あれ見よ、これほどに人目のまれな所に、何たる人の来るか、  
忍ぼうずる事ならば、忍ぼう」と仰せられたれば、 (巻四、373) 〈疑い／会話〉

その他、「疑問詞一カ」がゾの場合と異なるのは、(15a-b) のように会話文で用いられる際に、聞き手に対して詰問調で問う例が見られるという点である。

- (15) a. 斎藤五、斎藤六大覚寺へ参って「北条はすでに明日たちまらせうずるが、なぜに聖はまだ見えさせられぬか」と申せば、 (巻四、388-389) 〈問い／会話〉  
b. <sup>宗盛一侍たち</sup>「[...] かたじけなくも帝王も三種の神器もござれば、何たる野の末、山の奥までも御幸のお供をつかまつらうとは思はぬか」と、言はれたれば、  
(巻三、194) 〈問い／会話〉

(15a) は、明日にも北条に斬首されそうな若君を案じる斎藤五・斎藤六が、助けに來ない聖のことを詰問調で北の方に問い詰める場面であり、(15b) は宗盛が侍たちに帝への忠心の無さを責める場面である。これらは末尾に「？」が付されていない点からも、(12a-b) のような純粋な質問というよりも、相手を責め立てる詰問調の口調であることが窺える。

また(16a)の例は、戦に妻子を連れてこなかった維盛に対して投げかけられた〈問い〉である。「？」があるため一見純粋な質問のようにも思われるが、(16b)の覚一本では、「などや—ぞ」とあり、解答を求めるよりも、詰問調で責めたてる〈反語〉に近い問いであることが窺える。

- (16) a. 宗盛「なぜにそれ〔※息子の六代殿〕はお連れあらなんだか？」維盛「行方とてもたのもしうもござない」と言うて、問うにつらさの涙を流された。  
(巻三、190) 〈問い／会話〉  
b. などや心づよう六代どのをば具し奉り給はぬぞ。 (覚一本『平家』下110)

まとめると、「疑問詞一ゾ」は会話文における〈問い〉が中心であり、聞き手に積極的に働きかけて明確な解答を要求する言語行為であると言える。一方で「疑問詞一カ」は、心中思惟や地の文で示される〈疑い〉が中心をなし、聞き手への働きかけは弱く消極的で、自身の心情を吐露することが中心の言語行為といえる。

すなわち、聞き手への働きかけの相違が、文末助詞ゾとカの大きな違いであるといえる。

### 3.4 「疑問詞一カ」の統語構造

#### 3.4.1 二文連置

では聞き手への働きかけが弱い〈疑い〉の言語行為をとる「疑問詞一カ」は、どのような統語構造で現れるのか。『天草平家』を観察すると、それらは次のように注釈的二文連置（以下、二文連置）の形となって現れていることがわかる。地の文を(17a-b)、心中思惟を(18a-b)に示す。

- (17) a. 忠度はどこから引き返されたか、侍を五人連れて、俊成卿の宿所にうち寄せて見



らるれば, (巻三、181)

b. その夜半ばかりに富士の沼にいくらかも群れ居た水鳥どもが何に驚いたか, たった一度にぱっとたった羽音が大風や, 雷などのやうに聞こえたれば (巻二、152-153)

c. つはものども義経の矢面にふさがるを五騎射落され, 義経あらはにならせらるるところに, いつのまに進んだか, 嗣信義経の矢面にむずと隔たるところを (巻四、333)

(18) a. さて成親卿をばいづくにおかれたかとここかしこの障子を引きあげ, 引きあげ見らるれば, (巻一、30)

b. <sup>〔※成親卿〕</sup>「あはれこれは日頃のあらましごとが漏れ聞こえたと見えた:誰が漏らいたか, さだめて北面のものどもがなかにあらうず」と思わぬことなう案じ続けておぢやったところに, (巻一、27)

これらの「疑問詞一カ」は、文としての独立性が高く、後続の文と合わせれば、二つの文が連置されていると解釈されるものである。これは室町～江戸期の間接疑問文を調査した高宮 (2005: 95) が「室町時代と江戸時代の間接疑問文は、現代のものに比べて、[…] 未だ文中の疑問文が文としての独立性を保持した構文として位置付けられるものである。」と指摘する通りである。

注目されるのは、こうした二文連置と見られるものの中に、次の (19) のような、二文連置と間接疑問文の中間に位置するような例が存在する点である。

(19) 光能卿「当時はわが身も官をもやめられて心苦しい折節ぢや: また法皇も押し寵められさせられてござれば, 何とあらうか, 知らねども, うかがうて見う」と言うて, (巻二、146)

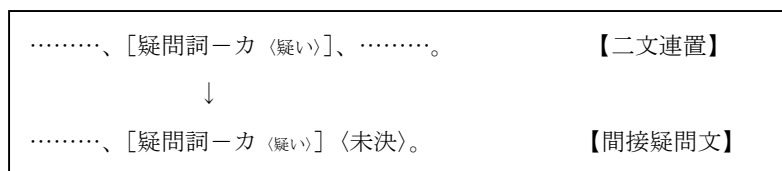
「何とあらうか」の部分は、直後に「,」があるため挿入された一文と考えられるが、この「,」がなければ、傍線部は現代語の間接疑問文とほぼ同等と見なしうるものである。

以上から考えると、「疑問詞一カ」の間接疑問文は、上記 (17) - (19) のような二文連置の構造を経てから、現代語のような節による間接疑問文を形成するようになったことが推測される。

### 3.4.2 言語行為と統語構造の相関性

間接疑問文が二文連置の構文を契機として発達したとする指摘は、高宮 (2004・2005)、Kinsui (2007) に指摘がある。その推移を図示すると【図2】のようになる。

【図2】二文連置から間接疑問文への推移



高宮 (2004) は、「一ヤラ (ウ)」を疑問節にとる間接疑問文の成立について考察し、(20a) のような注釈的二文連置の段階を経て、(20b) のような間接疑問文が成立したと推定している。

(20) a. ナントシタ心ヤラウ論語ニハ言語ヲ政事之上ニヲイタガ司馬遷ハ政事ヲ上ニヲイタソ  
(史記抄・十・43 オ⑤)

b. 世説ニハ注カナイ物チヤホトニ何ト義理ヲ付ウスヤラ知ラスホトニ推シテ義ヲ付ルソ  
(蒙求抄・五・21 オ⑥)

高宮 (2004 : 118 (29) (28) より)

前掲 (17) - (19) を考慮するならば、「疑問詞一カ」をとる間接疑問文においても、上記の「ヤラ (ウ)」の場合と同様に、二文連置の段階を経て成立したものと考えられる。

ところで二文連置から間接疑問文へと発達する際に重要な点は、「疑問詞一カ」に後続する述語のタイプが、〈未決〉〈既決〉〈対処〉の三タイプ<sup>5</sup> (藤田 2000) のうち、(21) のような〈未決〉から現れてくるといふ点である (高宮 2005)。

(21) 上に産んだか下に産んだか存ぜぬ。 (エソポ・16⑭) (高宮 2005 : 104 (3))

特に、室町時代から江戸時代にかけての疑問詞疑問文の述語では〈未決〉、それに次いで〈対処〉が多い。〈既決〉の述語が現れにくい理由に対して、高宮 (2005 : 96) は、「どうすればいいのだろうか」という疑問文が表す不確定の事態と、確定していることを表す〈既決〉の述語が、反対の内容を表すことから、両者が結びにくかったためと推定している。

本発表ではこれに加え、「疑問詞一カ」が〈未決〉の述語を後続させやすいのは、「疑問詞一カ」が〈疑い〉という消極的な言語行為であることが関与していると考えられる。既述の通り、「疑問詞一カ」の〈疑い〉は、聞き手に対しての働きかけが弱い言語行為である。したがって〈疑い〉を提示した直後には、その〈疑い〉に対する自身の判断を後続させやすくなる。その判断が、多くの場合、〈未決〉で表現されたものと考えられる。

〈疑い〉の直後に〈未決〉の述語が後続する例は、抄物の肯否疑問文に散見する。『玉塵抄』では、「一カ」という〈疑い〉を表す肯否疑問文で、「知らぬ」「心得ぬ」といった〈未決〉の述語が後続する例が複数見られる。

(22) a. 通ト云ハ。 カラノリヤウメノコトカ。 シラスソ。 (玉塵抄、巻一、93)

b. 俘 (フ) ハトリコトヨムソ。 メシウトノコトソ。 シハラレタ。 メシウトナリ。 コ、ノ俘ト云カ。 心エヌソ。 (玉塵抄、巻一、129-130)

c. 戚足ハ。 シハムトヨムソ。 チイザウトリツホメタコトカ。 ヨウモエ知ヌコトソ。 (玉塵抄、巻二、225)

d. 洞庭君ハ。 仙女ナリ。 湘妃ヲ云タカ。 シカトハ。 ヲホエス。 (玉塵抄、巻二、250)

<sup>5</sup> 藤田 (2000 : 533-539) から〈未決〉〈既決〉〈対処〉についてまとめると次の通り。

未決：懸案 (= 答えられ、解決されるべき未定事項) が未決であるもの。

(例) わからない、知らない、覚えていない、不思議がる、疑問に思う、怪しい

既決：懸案が既決であるもの。

(例) 知っている、明らかだ、判断がつく

対処：懸案を未決から既決の方向へ押し進めようと対処がなされることを示すもの。

(例) 考える、明らかにする、量る

このように、〈疑い〉を示した直後に、その判断として〈未決〉の述語をとる傾向が肯否疑問文・疑問詞疑問文ともにあり、それが間接疑問文成立への契機となったと思われる。

なお、抄物では「疑問詞一カ」が少ないが、調査範囲の中ではわずかに(23)の例があり、それは次のように二文連置を生じ、後続の文は〈未決〉で結ばれている。

(23) タレモ、嬰ヲ、ヒキタテ、宦ニモ、ス、ムルモノナイ心、タスクルモノナセニ、孺子老秃ヲ、トギニ<sup>6</sup>シタコトカ、ネンゴロニ、心エワケヌソ、(玉塵抄、巻四、466)

以上をまとめると、間接疑問文は、二文連置の構文を契機として発達したと推定される。これは、係り結びが二文連置から発達したと推定される(野村 1995)のと軌を一にしており注目される。また、その二文連置は、「疑問詞一カ」が、相手に積極的に働きかける言語行為の〈問い〉ではなく、働きかけの弱い〈疑い〉の言語行為であったからこそ、〈疑い〉に対する判断(=〈未決〉)の文を後続させやすく、それが二文連置から間接疑問文へ移行する契機となったと考えられる。

## 5. 文末助詞「ゾ」と「カ」の相違

ここまで観察した中での「疑問詞一ゾ」と「疑問詞一カ(ヤ)」の関係について整理する。

【表 9】

	疑問詞一ゾ	疑問詞一カ
疑問詞	「なぜに」が多い。	特定の疑問詞との結びつきなし。
言語行為	〈問い〉が多い。	〈疑い〉が多い。 (〈問い〉では詰問調)
使用場面	会話文	心中思惟・地の文
構文的特徴	主節が多い	注釈句的二文連置になりやすい。

これらから考えると、「疑問詞一ゾ」は現代語での「一ノカ」というノダ文に相当し、反対に「疑問詞一カ」は「一カ」というノを伴わない疑問文に相当する特徴を多く備えているといえる。

まず、現代語においてノダ文となる疑問詞疑問文の特徴を列挙する(益岡・田窪 1989、野田 1997 参照)。

(24) a. 「なぜ」「どうして」の疑問詞をとる場合には、原則としてノダ文になる。

(例) なぜそんなに英語が上手なんですか？

b. 主節の疑問詞疑問文の場合、普通体では、原則としてノダ文になる(丁寧体ではノダ文でなくてもよい)。

(例) 誰がそんなことを言ったの(か)？

以上の二点から考えると、「疑問詞一ゾ」は、「なぜに」という疑問詞と結びつきが強いこと(25a)、会話文での主節の疑問詞疑問文で用いられやすいこと(25b)から考えると、(24a, b)の特徴を備

6 「二」は一部虫損あり。

えており、現代語でいう「一ノカ」というノダ文の疑問文に近いと考えられる。

- (25) a. 頼朝池殿に对面あって、「なぜに宗清は参らぬぞ」と仰せらるれば、(巻四、321)  
b. 「どこへ行くぞ?」「屋島へ参る」 (巻四、330)

一方で、「疑問詞一カ」の特徴は、次の(26a-b)のような、現代語でのノを伴わない疑問詞疑問文の特徴に合致する点が多い。

- (26) a. 自問型の疑問詞疑問文は、普通体・丁寧体共にノを伴わない「一カ」を使ってよい。  
(例) あのノートはどこへやったか。  
b. 詰問調の場合の疑問詞疑問文は、ノダ文にならない。  
(例) なぜ黙っていた?

- (27) a. [※成親卿]「あはれこれは日頃のあらましごとが漏れ聞こえたと見えた：誰が漏らいたか、さだめて北面のものどもがなかにあらうず」と(後略) ((18b)再掲)  
b. 斎藤五、斎藤六大覚寺へ参って「北条はすでに明日たちませうずるが、なぜに聖はまだ見えさせられぬか」と申せば、 [詰問調] ((15a)再掲)

心中思惟で多用される自問型の疑問文(27a)ではカが使用され、また、詰問調(27b)でもゾではなくカが使用される。

以上から考えると、「疑問詞一ゾ」のゾは概ね現代語のノダに相当し、「疑問詞一カ」のカは現代語のカに相当するものであると考えられる。

## 6. まとめ

本発表では、疑問詞疑問文の「疑問詞一ゾ」と「疑問詞一カ」を比較し、主に次の点を明らかにした。

- (28) a. 「疑問詞一ゾ」は「なぜに」の疑問詞という理由を求める疑問詞との結びつきが強い。一方、「疑問詞一カ」には、特定の疑問詞との結びつきがない。  
b. 「疑問詞一ゾ」は、対話相手に積極的に働きかける〈問い〉の言語行為として用いられやすく、会話体の主節で使用される例が多い。一方、「疑問詞一カ」は、消極的な働きかけしかない〈疑い〉の言語行為であり、心中思惟・地の文で用いられやすい。  
c. 中世日本語の「疑問詞一カ」は、文としての独立性が高く、後続の文と二文連置を形成する例が多い。これは「疑問詞一カ」が〈疑い〉という消極的な言語行為であるため、自己の判断を示す文を後続させやすく、二文連置を形成しやすかったと思われる。その後続する文の述語は〈未決〉が多く、その二文連置が間接疑問文へ発達する一つの契機となったと推定される。  
d. 現代語の疑問文と対照させると、「疑問詞一ゾ」はノダ文になる疑問文と合致する点が多く、反対に、「疑問詞一カ」はノダ文とならない疑問文と一致する特徴を多く備

えている。

さらに【図1】を踏まえて考えると、「疑問詞一ツ」は、命題に対する話し手の〈疑念〉を積極的に他者に働きかける言語行為であるために、〈疑念〉に対する理由を求める「なぜに」という疑問詞との結びつきが強い(28a)という特徴が現れるものと理解される。

間接疑問文の成立においては、文末助詞や疑問詞を、統語構造、言語行為といった観点と関連付けて今後も議論してゆく必要がある。本発表では扱わなかった〈反語〉がいかに位置づけられるかも今後の重要な検討課題と考えられる。

#### 【参考文献】

- 安達太郎 (2004) 「疑問文における反語解釈をめぐる覚え書き」『京都橘女子大学研究紀要』31, pp.250-235 (左開き)
- 紙谷榮治 (2000) 「中世における疑問表現について」『国文学』80, 関西大学国文学会, pp.72-82
- 衣畑智秀・岩田美穂 (2010) 「名詞句位置の力の歴史: 選言・不定用法を中心に」『日本語の研究』6-4, pp.1-15
- 磯部佳宏 (1992) 「『平家物語』の要説明疑問表現」辻村敏樹教授古稀記念論文集刊行会編『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』明治書院, pp.293-308
- 磯部佳宏 (1993) 「『平家物語』の要判定疑問表現」『日本文学研究』29, 梅光学院大学, pp.187-200
- 高宮幸乃 (2004) 「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立: 不定詞疑問を中心に」『三重大学日本語学文学』15, pp.124-111 (左開き)
- (2005) 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16, pp.104-92
- 外山映次 (1957) 「質問表現における文末助詞ゾについて—近世初期京阪語を資料として—」『国語学』31, pp.37-46
- 長瀬富子 (1967) 「室町時代の疑問表現——助詞を中心として——」『国文学 言語と文芸』9-5, pp.44-53
- 野田春美 (1997) 『「のだ」の機能』くろしお出版
- 野村剛史 (1995) 「カによる係り結び試論」『国語国文』64-9, pp.1-27
- 藤田保之 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 宮地裕 (1971) 「疑問表現をめぐる」『国語国文』20-7, pp.1-16
- 矢島正浩 (1995) 「天草版平家物語における反語表現: 古典平家物語との比較を通じて」『国語国文学法 (愛知教育大学)』53, pp.47-63
- 柳田征司 (1985) 『室町時代の国語』東京堂出版
- 山口堯二 (1990) 『日本語疑問表現通史』明治書院
- Kinsui, Satoshi. (2007) *The Interaction between Argument and Non-argument in the Diachronic Syntax of Japanese, Current Issues in the History and Structure of Japanese*, Kurosio Publishers. pp.253-261
- 【調査資料】 ※下線部を資料略称名として用いた。  
『天草版平家物語』(底本: 大英図書館蔵本、1593年): 江口正弘編 (2010) 『天草版平家物語 影印編』新典

- 社、江口正弘注釈（2009）『天草版平家物語全注釈』新典社
- 『サントスの御作業』（底本：オックスフォード大学ボードレイ文庫蔵本、1591年刊）：H. チーリスク・福島邦道・三橋健解説（1976）『サントスの御作業』勉誠社、福島邦道（1979）『サントスの御作業 翻字研究篇』勉誠社
- 『玉塵抄』（底本：国立国会図書館蔵本、永禄六〔1563〕—慶長二〔1597〕年）：中田祝夫編（1970）『玉塵抄（1）』勉誠社
- 『毛詩抄』（底本：京都大学附属図書館・清家文庫蔵古活字本『毛詩』）：清原宣賢講述、倉石武四郎・小川環樹校訂（1996）『毛詩抄 詩経（一）』岩波書店